

## 明治以降の漢語形容動詞の発達について

周 菁

**要旨：**明治期は漢字語の最も増加した時代である。学術用語等の名詞だけではなく、二字動詞、形容動詞も多く増えた。形容動詞の増加に関しては、和語形容詞の不足を補うのが動機付けと考えられていたが、その他の要因はないのか。本稿は、近代以降の形容動詞の発達に関する研究の第一歩として、まず形容動詞の急増の実態を明らかにしようとする。つまり上代から近代までの漢語形容動詞の語数の変遷、漢籍語と非漢籍語の比率、日中同形語の状況等を調査し、語彙リストを作成した。明治期の漢語形容動詞の発達に関する研究の基礎資料としたい。

**キーワード：**明治 漢語 形容動詞 発達

### 一、はじめに

明治時代に日本語の語彙に激しい変化が見られ、その変化の一つに漢語語彙の急増があげられる。急増した漢語は、明治初年にはほとんど名詞として用いられていたが、のちにサ変動詞や形容動詞など他品詞にわたって使われるようになったと言われている<sup>1</sup>。新しく誕生した形容動詞は名詞のように新しい文物や思想を表現するものではなく、明治時代の特色を鮮明に表したものでないようだが、相当の数が使われていたことは非常に興味深い事実である。そこで、本論文では、明治以降における漢語<sup>2</sup>形容動詞の発達について初歩的考察を行い、その全体像を概観する。

### 二、形容詞・形容動詞の歴史的変遷

形容動詞は形容詞と同じ機能を有し、その語彙の貧弱を補うために登場したと言われている<sup>3</sup>。つまり、形容動詞の発生・発達には形容詞と深くかかわっていると思われる。したがって、ここでは形容詞と形容動詞の起源に触れながら、両者の歴史的変遷、特に漢語形容動詞の発達を語数の変化から見てみたい。

<sup>1</sup> 宮島達夫（1983）「現代語いの形成」『論集日本語研究 15 現代語』有精堂，165－180 頁

<sup>2</sup> 本稿の言う「漢語」は「字音で読まれる語」を範囲とし、必ずしも古代中国語からの語を指すわけではない。よって、和製漢語や当て字の場合、音読みの語であれば、「漢語」として認める。この判断基準は安部清哉ほか（2009）『シリーズ日本語史 2 語彙史』岩波書店，105 頁を参考した。

<sup>3</sup> 柏谷嘉弘（1973）『形容動詞』の成立と展開『品詞別日本文法講座 4 形容詞・形容動詞』明治書院，158 頁。

発生の観点から見ると、形容詞は名詞から派生したものと、動詞から派生したもので形成されたとされている<sup>4</sup>。一方、形容動詞は名詞に「ニアリ」または「トアリ」が接続して成立したと考えられている<sup>5</sup>。表1は「上代」「中世」「近代」に分けて、両者の語数の歴史的变化を表わしたものである。上代語と中世語は『日本古典対照分類語彙表』(2014)、近代語は『日本語語彙大系』(1997)を基に抽出した。具体的には、「上代」は『万葉集』からの語で、総計 6,601語を収録した。「中世」は『徒然草』『平家物語』『宇治拾遺物語』『方丈記』という鎌倉時代の4作品から取り出した語で、総語数は 18,307語である。近世に関しては適切な資料が見当たらなかったため、近世語を省き、近代語と比較することにした。近代語の資料となる『日本語語彙大系』は自然言語処理のための辞書として、NTT コミュニケーション科学研究所が監修し、日本語の語彙 30万語近くを意味属性で分類したものである。その中の 18万程度の固有名詞を除いて、収録した一般語は 88,954語である。このように調査資料の性格が異なるため、厳密な比較はできないが、形容詞および形容動詞のおおよその発達傾向は窺えると考えられる。

表1 形容詞・形容動詞の語数の変化

		上代	中世	近代
形容動詞	和語	37 (100.00) <sup>6</sup>	277 (73.47)	717 (20.76)
	漢語	0 (0.00)	89 (23.61)	2,231 (64.59)
	その他	0 (0.00)	11 (2.92)	506 (14.65)
	総語数	37 (0.56) <sup>7</sup>	377 (2.06)	3,454 (3.88)
形容詞		239 (3.62)	371 (2.03)	914 (1.03)
形容詞・形容動詞		276 (4.18)	748 (4.09)	4,368 (4.91)

まず、時代ごとの形容詞・形容動詞全体の数を見ると、276語→748語→4,368語と大幅に増えているが、総語数に占める比率から見ると、4.18%→4.09%→4.91%と比較的に安定していることがわかる<sup>8</sup>。日本語を他言語と比較し、形容詞が基本語に占める比率を調べた玉村(1985)<sup>9</sup>によると、英語、ドイツ語、フランス語と中国語のいずれも形容詞が占める割合は15%前後で

<sup>4</sup> 山崎馨(1992)「第四章形容詞の発達」『形容詞助動詞の研究』和泉書院、65頁。

<sup>5</sup> 玉村文郎(1985)「形容詞の世界」『日本語学』3月号、明治書院、9頁。

<sup>6</sup> ここからの三行の括弧の中は和語形容動詞、漢語形容動詞とその他の形容動詞がそれぞれ形容動詞総語数に占める百分率を示すもので、小数点以下2桁まで表示する。

<sup>7</sup> ここからの三行の括弧の中は形容動詞、形容詞と形容詞・形容動詞全体がそれぞれその時代の統計資料の総語数に占める百分率を示すもので、小数点以下2桁まで表示する。

<sup>8</sup> 近代語における形容詞・形容動詞が総語数に占める百分率について、金田一京助ほか編、小学館『新選国語辞典』第8版(2001)と第9版(2011)の統計によれば、辞書の収録した形容詞・形容動詞が固有名詞などを除いた一般語に占める割合はそれぞれ3.26%と3.19%で、より低い比率を示している。

<sup>9</sup> 玉村文郎(1985)「形容詞の世界」『日本語学』3月号、明治書院、4-12頁。

あったが、一方日本語の場合、4種の語彙資料<sup>10</sup>をもってそれぞれ統計を行ったが、形容詞だけでは1.81%—3.93%にとどまり、形容動詞を加えても、4.57%—6.24%という比率で、他言語の三分の一に満たさなかったことが明らかとなっている。本稿の調査では、玉村の結論と一致している。つまり、他言語と比べ、日本語の形容詞・形容動詞は数が少なく、発達していないと言えよう。

次に、時代ごとに形容詞と形容動詞の変化を見てみたい。上代形容詞・形容動詞の総語数は276語あり、その中で形容詞が239語と圧倒的に多いことがわかる。形容動詞はわずか37語であり、さらにすべて和語で、漢語は一つもなかった。中世になると、形容詞の数は239語から371語とだいぶ増えたが、形容動詞ほど増えてはいない。形容動詞は37語から377語に急増し、10倍以上に増えている。さらに、形容詞と順位を交代し、形容動詞のほうがより多くの語が存在していることがわかる。そのうえ、漢語の形容動詞が登場し、89語とまだ数は少ないが、和語だけの世界を突破し、勢力を張り始めたことは注目すべきである。ほかに「他の形容動詞」も11語あったが、すべて和漢混種語である。近代語における形容詞は914語で、三桁にとどまったが、形容動詞は3454語と勢いよく増え、形容詞を大きく上回った。また、語種という視点から見て、漢語形容動詞は中世の89語から2,231語に増加し、目覚ましい発展ぶりを見せた。一方、和語形容動詞は717語にとどまり、漢語形容動詞に一位の座を譲った。さらに、「他の形容動詞」も506語と和語形容動詞の数に迫るほど増加してきているが、その中には外来語284語と混種語222語が含まれている。

以上の分析から分かるように、近代日本語の形容詞・形容動詞の発達に、形容動詞、特に漢語形容動詞が最も貢献していることがわかる。上代に形容動詞と形容詞の数は37語と239語という差で、形容詞が圧倒的に優勢だったが、中世には形容動詞の語数は形容詞を上回りはじめ、近代では形容動詞が優位に立っている。また、漢語形容動詞は『万葉集』に一語もなかったが、徐々に姿を見せ始め、中世に89語と形容動詞の23.61%、近代に2,231語と形容動詞の64.59%を占めるという急成長を遂げた。明治期における漢語形容動詞の急増はこの近代語に見られた漢語形容動詞の爆発的な増加という事実と因果関係があると推測できよう。よって、次は明治以後の漢語形容動詞を中心に、それらの語の在り方を探る。

### 三、明治以後の漢語形容動詞

#### 3.1 明治以後の漢語形容動詞の認定

明治以後の漢語形容動詞を確定するために、『日本語語彙大系』の見出し語を対象とした。『日本語語彙大系』の「語彙体系分類」によると、収録全語彙数は274,405語で、その中に動詞16,413語、形容詞914語と名詞（形容動詞）3,454語が含まれている。

<sup>10</sup> 4種の語彙資料はそれぞれ『雑誌90種』『分類語彙表』『分類語彙表中心語彙』『国語教材（大西）』である。

分析の手順として、まず『日本語語彙大系』の名詞（形容動詞）3,454語より漢語形容動詞を抽出した。中国製か和製かを構わず、音読みの語である限り、すべて漢語と認定し、その結果2,231語の漢語形容動詞リストを作成した。次に、漢語形容動詞リストを基に、一語ずつ『日本国語大辞典』第2版を参照し、それぞれの使用例の初出年を確認した。語形と意味のいずれかが1868年以降のものであれば、明治以後の漢語形容動詞と見なし、リストの中の語が『日本国語大辞典』第2版に載せられていなかったり、使用例が示されていなかったりする場合、『大漢和辞典』を参考にした。それでも見つからない場合、由来不明の語として今回の研究範囲から除外した。ただし、「○○的」式の語で、見出し語として載せられなかったが、「的」の前の○○の初出使用例が明治以降の場合、その語を明治以降の語と認定した。もちろん、初出年が1868年以降であっても実際に明治以前に作られたり、使われたりしていた可能性もあるが、すべての語を語誌考察することができないので、以上の分析で得た語を基礎資料とし、より厳密な考察は今後の課題とすることを断っておきたい。

調査の結果、1,050語の漢語形容動詞が明治以降のものとして確認された。前節でも言及した通り、近代における漢語形容動詞の数は和語形容動詞より大幅に上回り、形容詞・形容動詞の50%以上の割合を占めている。また、明治維新を境に、1,050もの語が新しく誕生したか、もしくは新しい意味が使われるようになった。時代が大きく移り変わったとはいえ、名詞だけではなく、形容詞・形容動詞の範囲までこのような激しい変化が起こったことは実に驚くべきことであろう。言い換えれば、現在われわれが使っている形容動詞の半分以上が漢語のもので、その中のまた半分程度が明治以降になって生まれた語か意味である。社会の近代化に伴い、言葉もそれにつれられ近代化したと考えられる。では、それら「近代」漢語形容動詞が一体どのような特徴があるのか、以下語形と出自の二視点から分析を試みたい。

### 3.2 日中同形語

明治以降の漢語形容動詞1,050語の中、語形という観点からどれくらいの日中同形語があるかを調べるため、『漢語大詞典』と『現代漢語詞典』第6版の見出し語と照らし合わせて調査を行った。日中同形の判断基準として、簡体や繁体などの違いを考慮から外し、それぞれの語を構成する字が歴史的に同一の字である場合、同形と見なしている。具体的な手順は、まず明治以降の漢語形容動詞リストに入られた語を中国語の書き方に書き換え、『漢語大詞典』の見出し語として載せられているかどうかを確認する。載せられていたら、その語が日中同形語と判断する。載せられていない場合、『現代漢語詞典』第6版の見出し語にあるかどうかを確認する。見出し語として確認した場合、その語を日中同形語と認める。以上の作業によって、日中同形語420語を得た。字数別から見ると、一字語が11語、二字語が398語、三字語が2語、四字語が9語、五字語が0語となっている。以下は字数別に日中同形語を提示する。

(1) 急 経 酷 惨 燦 純 珍 漠 別 密 尤

一字語の場合、国字がないので、11 の語が全部日中同形語となっている。

(2)	哀切	曖昧	悪性	啞然	安易	安静	暗澹	易々
	異質	異常	偉大	一定	殷々	陰險	因業	陰惨
	陰湿	陰性	隱然	淫蕩	淫猥	迂遠	鬱然	鬱勃
	永遠	永久	銳敏	銳利	蜿蜒	円滑	婉曲	鉛直
	円満	艷麗	旺盛	横暴	穩健	温厚	溫柔	怪異
	恢々	快活	開豁	晦渋	剴切	快速	快適	諤々
	確實	画然	過激	苛酷	過重	寡少	過少	過剩
	下等	可能	過敏	佳良	閑雅	頑強	簡勁	簡潔
	頑健	頑固	閑散	甘美	完璧	緩慢	簡明	頑迷
	奇異	奇々	奇矯	奇警	危険	奇抜	機敏	急激
	旧式	急峻	器用	狹隘	恭謙	強硬	強靱	狹長
	共通	凶暴	強力	強烈	極端	欣快	緊切	謹直
	空虚	空々	空漠	輕易	輕快	敬虔	輕少	輕便
	輕妙	輕量	激越	結構	傑作	潔癖	下品	險惡
	狷介	謙虚	健在	堅実	嚴肅	喧噪	懸命	絢爛
	光荣	高雅	狡獪	豪快	広闊	高貴	高級	皓々
	公式	豪勢	公然	高燥	豪壯	高速	荒誕	豪胆
	高度	荒唐	高等	広範	好評	合法	巧妙	宏量
	克明	古拙	滑稽	孤独	最高	細心	細緻	犀利
	索然	索莫	雜然	燦然	嶄然	湿润	失当	執拗
	至難	自明	弱小	洒脱	醜惡	醜怪	周到	重要
	肃々	主要	純潔	峻險	峻嚴	純真	純粹	純正
	純然	順当	純白	醇美	俊敏	淳良	純良	峻烈
	詳細	蕭殺	小心	冗漫	熾烈	新銳	深刻	真摯
	新式	新鮮	親密	神妙	随意	垂直	随分	水平
	数奇	崇高	正確	精確	精悍	正規	盛況	凄惨
	静肃	清純	正常	生鮮	凄然	正則	清澄	正当
	静謐	赤裸	拙悪	絶佳	切実	全一	尖銳	潺湲
	繊細	繊弱	善良	蒼然	踴々	相当	蒼白	壮烈
	踉跄	惻々	粗雑	粗大	対等	頹唐	駘蕩	大量

多感	卓拔	多情	妥当	多肉	多様	単一	単純
単調	堪能	緻密	中空	忠実	超然	直角	著名
陳腐	痛切	通俗	低級	貞淑	低速	低俗	低調
低能	低劣	低廉	適宜	適正	適當	典麗	獐患
同一	瞠若	蕩々	堂々	得意	独自	特殊	特種
独特	特別	特有	独立	訥々	突飛	鈍重	貪欲
内密	入用	熱烈	年長	濃厚	濃密	沛然	破格
薄弱	拔群	薄幸	澆刺	繁劇	煩瑣	繁縟	卑屈
非常	悲壯	悲愴	皮相	必須	必要	微妙	美妙
飄々	敏活	貧寒	敏感	貧困	貧弱	敏速	複雑
蕪雜	不熟	不振	不正	不定	無難	不能	不敏
不服	不平	不便	不毛	不良	平滑	平常	平静
平淡	平板	平凡	平明	別個	變則	豊艶	膨大
茫漠	放漫	豊満	茫洋	豊沃	豊麗	密接	無垢
無限	無効	夢中	無謀	無用	明快	明確	明晰
妄誕	悶々	躍如	野蛮	有為	憂鬱	優雅	有効
優秀	有数	優勢	雄大	優等	有毒	有望	悠揚
優良	有力	洋々	磊落	乱暴	爛漫	慄然	隆々
良質	冷酷	冷静	冷然	冷淡	麗々	劣勢	劣等
廉価	老獯	陋劣	朗々	露骨	矮小		

二字漢語は 398 語も挙げられたが、その中の「因業」「隱然」「過少」「奇奇」「最高」「至難」「蒼然」「多肉」「瞠若」「不能」「有毒」という 11 語が、『漢語大詞典』と『現代漢語詞典』第 6 版のいずれにも出ていなかった。しかし、『日本国語大辞典』第 2 版または『辭源』第 3 版に中国古典からの典拠が示されているため、日中同形語と認定した。また、「好評」「中空」「低速」「低俗」「優等」の 5 語は『漢語大詞典』では未収録だが、『現代漢語詞典』第 6 版では収録されているということがわかった。『漢語大詞典』のほうにはるかに収録語数が多いが、『現代漢語詞典』第 6 版は出版年が 20 年ほど遅いので、この 5 語は新語か収録漏れになった語であろう。

### (3) 神經質 赤裸々

三字日中同形語は三字漢語形容動詞 449 語の中のわずか 2 語しかなかった。三字漢語形容動詞はほとんど接辞と語基の組み合わせでできているので、中国語では一語として認められない。たとえば、三字語で最も高い割合を占めている「○○的」の類や、否定を表す「無○○」「非○

○)「未○○」「没○○」の類など、非常に生産性が高く、今後もますます新しい形容動詞を作っていくだろうと思われる。それらの語は中国語で一つの語ではないが、フレーズとしては使われている。品詞性や語構造を考慮に入れなければ、意味上では日中対応になっているものがより多く存在していると考えられる。

(4) 一目瞭然 一心同体 氣息奄々 厚顔無恥 古色蒼然 神經過敏 直情徑行  
天衣無縫 不得要領

四字漢語 75 語の中で、9 語が日中同形である。9 語の中、「一心同体」「古色蒼然」と「神經過敏」以外の 6 語が中国語の成語である。「古色蒼然」は『漢語大詞典』や『現代漢語詞典』第 6 版の見出し語ではないが、『日本国語大辞典』第 2 版に中国の典拠が示されたため、同形語として数えた。「神經過敏」と「一心同体」は日中ともに同じ意味を指し、熟語になっていると考える。

日中同形語の認定に一般的に認められている基準はいまだにないようである<sup>11</sup>。以上取り上げた 420 語は漢語形容動詞より割り出したため、明治以降の漢語形容動詞の中から、字音語で字形が一致するという狭義の範囲に限って、調査を行った。今後、その語彙リストを基に、形容動詞という修飾機能の語群が日中両言語における意味や使用上の異同等を明らかにし、日本語教育や近代語交流の研究に役に立ちたい。

### 3.3 語の出自

ここでは、漢語形容動詞の出自という観点から、語の典拠が古代中国に見られる「漢籍語」とそうでない「非漢籍語」の二種類に分け、考察を行いたい。語の典拠は日本の辞書『日本国語大辞典』第 2 版と『大漢和辞典』、中国の辞書『辭源』第 3 版と『漢語大詞典』を参考した。手順は 3.1 の作業で得た明治以降の漢語形容動詞 1,050 語を『日本国語大辞典』第 2 版と照らし、中国の古典から典拠が示されているかどうかを確認する。出典が確認できない場合、『大漢和辞典』、『辭源』第 3 版と『漢語大詞典』の順で再確認を行う。いずれの辞書においても出典元が中国古典であると確認できた場合、その語を漢籍語と判断し、そうでない場合は、非漢籍語と見なす。

調査の結果、1,050 語の中で漢籍語が 356 語、非漢籍語が 694 語あることがわかった。この数字を見れば、漢籍語は予想以上に少ないという印象になるかもしれないが、三字語で漢籍語であるものが一つもないことに注目してほしい。漢語形容動詞の中で、三字語は 449 語と半分近く占めており、その構成は接辞と語基の組合せがほとんどで、中国語では一語と認めないため、漢籍語と認定できない。例えば、「開放的」という語は「開放」+接辞「的」で構成され、「開

<sup>11</sup> 施建軍 (2013) 「中日同形詞共時比較研究的現状及存在的課題」『東北亜外語研究』第 1 号, 4-9 頁

放」は漢籍語と見なされるが、「開放的」は漢籍語と見なされない。そこで三字語を除いて調査した結果、三字語を含まない漢語形容動詞は601語あり、そのうち漢籍語が356語と、59.1%を占めることになる。漢籍語の占める比重が大幅に増えたが、それでも半分近くの語が非漢籍語である。非漢籍語はつまり近代の造語であり、これほど大量の語形が新しく作られたことは、漢字の造語力の高さを裏付ける結果となろう。以下は字数別に漢籍語を提示する。

(1) 急 経 酷 惨 燦 純 珍 漠 別 密 尤

一字語は11語あり、当然ながら全部漢籍語である。

(2)	哀切	曖昧	悪性	哑然	安易	安静	暗澹	易々
	異質	異常	偉大	一定	殷々	陰険	因業	陰惨
	陰湿	陰性	隠然	淫蕩	淫猥	迂遠	鬱然	鬱勃
	永遠	永久	鋭敏	鋭利	蜿蜒	円滑	婉曲	円満
	艶麗	旺盛	横暴	穩健	温厚	溫柔	怪異	恢々
	快活	開豁	晦渋	剴切	快速	快適	諤々	確實
	画然	過激	苛酷	過重	寡少	過少	下等	可能
	閑雅	簡勁	簡潔	頑健	頑固	閑散	甘美	完璧
	緩慢	簡明	奇異	奇々	奇矯	奇警	危険	奇抜
	機敏	旧式	急峻	器用	狹隘	恭謙	強硬	強靱
	狭長	共通	凶暴	強力	欣快	緊切	謹直	空虚
	空々	空漠	輕易	輕快	敬虔	輕少	輕便	輕妙
	輕量	激越	結構	傑作	潔癖	下品	險惡	狷介
	謙虚	健在	堅実	嚴肅	喧噪	懸命	絢爛	光荣
	高雅	狡獪	豪快	広闊	高貴	皓々	豪勢	公然
	高燥	豪壯	荒誕	豪胆	荒唐	高等	広範	合法
	巧妙	宏量	克明	古拙	滑稽	孤独	最高	細心
	細緻	犀利	索然	索莫	雜然	燦然	嶄然	湿润
	失当	執拗	至難	自明	弱小	洒脱	醜惡	醜怪
	周到	重要	肅々	主要	純潔	峻険	峻巖	純真
	純粹	純正	純然	順当	純白	醇美	俊敏	淳良
	純良	峻烈	詳細	小心	熾烈	新鋭	深刻	新式
	新鮮	親密	神妙	随意	随分	水平	数奇	崇高



精確	精悍	凄惨	静肃	清纯	生鮮	凄然	正則
清澄	正当	静謐	拙悪	絶佳	切実	全一	尖锐
潺湲	繊細	繊弱	善良	蒼然	踴々	相当	蒼白
壮烈	踴踴	惻々	粗雑	粗大	頽唐	駘蕩	大量
多感	卓拔	多情	妥当	多肉	堪能	緻密	忠実
超然	著名	陳腐	痛切	通俗	貞淑	適宜	適正
适当	典麗	瘳惡	同一	瞠若	蕩々	堂々	得意
独自	特殊	独特	特別	独立	訥々	貪欲	内密
入用	熱烈	年長	濃厚	沛然	破格	薄弱	拔群
薄幸	澆刺	繁劇	煩瑣	繁縟	卑屈	非常	悲壯
悲愴	皮相	必須	必要	微妙	美妙	飄々	貧寒
貧困	貧弱	敏速	複雜	蕪雜	不熟	不振	不正
不定	無難	不能	不敏	不服	不平	不便	不毛
不良	平滑	平常	平静	平淡	平板	平凡	平明
別個	豐艷	放漫	豐滿	茫洋	豐沃	豐麗	無垢
無限	無効	夢中	無謀	無用	明快	明確	明晰
妄誕	悶々	躍如	有為	憂鬱	優雅	有効	有数
雄大	有毒	有望	悠揚	有力	洋々	磊落	爛漫
慄然	隆々	良質	冷靜	冷然	冷淡	麗々	陋劣
朗々	露骨						

二字漢籍語は 338 語あり、漢籍語全体の 94.9%を占めている。

(3) 一目瞭然 一心同体 氣息奄々 古色蒼然 直情徑行 天衣無縫 不得要領

四字漢籍語は上の通り 7 語ある。四字漢語形容動詞は漢籍語と見なせるものは少ないが、「二字＋二字」の構造が多いため、その二字の語基がともに漢籍語の可能性を考え、調査したところ、以下の 28 語が当てはまった。

曖昧模糊 意志強堅 運動不足 感慨無量 奇想天外 虚心坦懷 輕佻浮薄 狷介孤高  
 絢爛豪華 傲岸不遜 荒唐無稽 豪放磊落 才氣煥發 質実剛健 春風駘蕩 支離滅裂  
 正々堂々 精力絶倫 千古不易 中途半端 天空海闊 天真爛漫 品行方正 風光明媚  
 無事安穩 無礼千万 平穩無事 融通無礙

五字の漢語形容動詞は二つあるが、三字語と同じくいずれも漢籍語ではない。

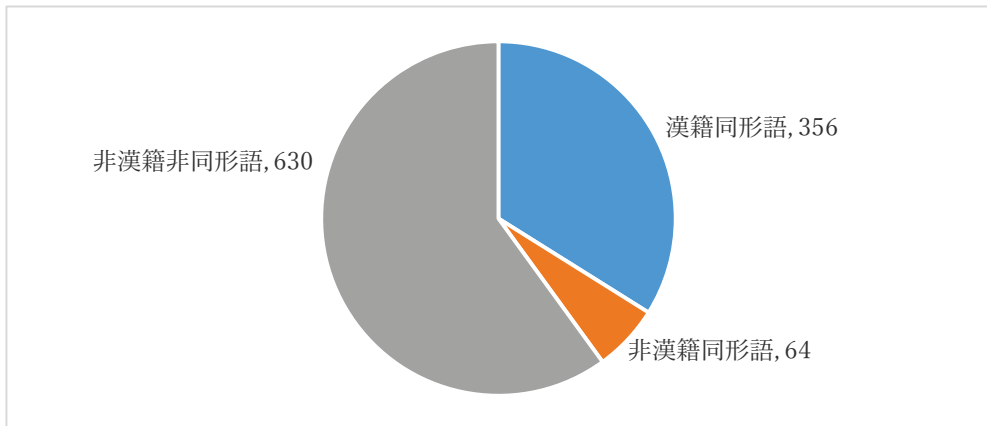
以上漢語形容動詞の中の漢籍語 356 語を取り上げた。漢籍語なので、日中同形語でもある。

典拠は中国古代の書籍であり、字形は日中同形であるが、新たな意味が加わっている。どうい  
うきっかけで新しい意味が生まれたか、その意味と中国同形語との異同等を今後の課題とし  
て考察を行いたい。

### 3.4 非漢籍由来の日中同形語

3.2 と 3.3 の調査からわかるように、明治以降の漢語形容動詞 1,050 語の中で、語形の観点か  
ら見ると、日中同形語が 420 語、非同形語が 630 語である。出自の観点から見ると、漢籍語が  
356 語、非漢籍語が 694 語である。さらに二観点から資料を調査した結果が図 1 である。漢籍語  
はすべて日中同形語であるため、図の通り日中同形語 420 語中、漢籍語が 356 語、非漢籍語 64  
語があることがわかった。それ以外は、非漢籍由来で日中同形語でもない 630 語である。

図 1 語形と出自から見る明治以降の漢語形容動詞



漢籍語の由来は言うまでもなく中国であるが、非漢籍語の場合、近代の造語として日本独自  
で作った語と中国で作って日本に輸入した語の両方が考えられる。ここでは、非漢籍語由来の  
日中同形語にしぼって、以下の通りその内訳を示す。

鉛直	過剩	過敏	佳良	頑強	頑迷	急激	強烈
極端	厚顔無恥	高級	公式	高速	高度	好評	蕭殺
冗漫	神經過敏	神経質	真摯	垂直	正確	正規	盛況
正常	赤裸	赤裸々	対等	多様	単一	単純	単調
中空	直角	低級	低速	低俗	低調	低能	低劣
低廉	特種	特有	突飛	鈍重	濃密	敏活	敏感
変則	膨大	茫漠	密接	野蛮	優秀	優勢	優等
優良	乱暴	冷酷	劣勢	劣等	廉価	老獯	矮小

管見の限りでは、以上 64 語の中で、辞書の見出し語以外に考察されていたのは「極端」「敏

感」「優秀」と「乱暴」の4語しかないのである。「極端」は高野（2004）<sup>12</sup>によると、1874年に出版された訳書『経済論』<sup>13</sup>の中の使用が初出で、それは「extreme」の訳語として用いられており、日本における造語の可能性が高いと指摘された。田中（2005b）<sup>14</sup>では、「敏感」を核とする関連語彙の体系とその形成について、『太陽コーパス』によって使用頻度などを考察した、「敏感」は1910年頃に誕生し、1920年近くに定着した日本生まれの漢語であると推測されている。「優秀」については田中（2005a）<sup>15</sup>によると、意味の近い関連語彙と使用頻度、主体の表示形式、共起語、使用域などの面で比較し、定着と語彙形成の視点から考察した結果、日本製か中国製かを言及しなかったが、1895年に初めて日本語の使用例が見られ、短い期間で普及に至った語であると述べている。「乱暴」は高野（2004）<sup>16</sup>によれば、近世語から近代語への移行に文字が転倒し、英和辞書<sup>17</sup>の「Distractedly」の訳に「暴乱」が「乱暴」になったと述べている。

その他の60語について、筆者は個々の語を『漢語大詞典』と『日本国語大辞典』第2版の初出と比べた結果、日本側のほうが初出が早いことがほとんどであるため、大多数が日本の造語である可能性が高い推測している。しかし、それはあくまで初歩的な考察で得た結論で、より厳密な研究が必要であることは言うまでもない。

これまでの研究では、明治以降の形容動詞で、非漢籍由来の日中同形語について、若干の語を除いて、語誌記述もされていないければ、発生や定着までのプロセスも研究されていない。また、日中同形となっているが、それぞれの語が中日両言語における交流や影響なども考察されていない。名詞である新漢語に対する研究が盛んに行われている一方、形容動詞である近代語についての考察が不十分だと言わざるを得ない。それらの問題は研究価値のある課題であると考え、今後より深く研究を行いたい。

#### 四、終わりに

本稿では、上代・中世・近代の資料を用いて、形容詞・形容動詞の語数の変化について調査した結果、形容動詞の目覚ましい発展ぶり、特に漢語形容動詞の著しい成長ということを明らかにした。漢語形容動詞の爆発的な増加の原因として、1.発達していない形容詞を補う。2.

<sup>12</sup> 高野繁男（2004）『近代漢語の研究—日本語の造語法・訳語法』明治書院, 106頁

<sup>13</sup> 『経済論』は文部省版『百科全書』の中の一冊で、堀越愛国が訳したものである。

<sup>14</sup> 田中牧郎（2005b）『「敏感」の誕生と定着—『太陽コーパス』を用いて—』『日本近代語研究』4 飛田良文博士古稀記念、ひつじ書房, 31-44頁

<sup>15</sup> 田中牧郎（2005a）『漢語『優秀』の定着と語彙形成—主体を表す語の分析を通して—』『国立国語研究所報告 122 雑誌「太陽」による確立期現代語の研究「太陽コーパス」研究論文集』, 博文館新社, 115-141頁

<sup>16</sup> 高野繁男（2004）『近代漢語の研究—日本語の造語法・訳語法』明治書院, 63頁

<sup>17</sup> 『英和对訳袖珍辞書』から『英和字彙』と書いてあるだけで、辞書のバージョンまで言及しなかった。

明治期の漢語名詞の急増に伴い、洋書の翻訳や文体統一のための必要性。3. 繊細な感受やニュアンスを使い分けるため、造語力に富み抽象性の高い漢語で形容詞を作ることが一番ふさわしい。の三つがあげられよう。

さらに、明治以降の「漢語形容動詞」について、2,231語の語彙リストを作り上げ、また日中同形語という範囲にしぼり、1,050語を調査した。その上、日中同形語の中で出典元により漢籍語356語と非漢籍由来の64語に分けて、考察を行った。

今後の課題として、今回の調査で得た語彙リストを土台に、個別の語に対する語誌研究や、明治以降における使用率の変化、類義語である漢語と和語の対応関係などを明らかにしたい。

### 参考資料

- NTT コミュニケーション科学基礎研究所監修 (1997) 『日本語語彙大系』岩波書店
- 日本国語大辞典第二版編集委員会, 小学館国語辞典編集部編 (2000) 『日本国語大辞典』第2版, 小学館
- 諸橋轍次著, 鎌田正、米山寅太郎修訂 (1984) 『大漢和辞典』修訂版, 大修館書店
- 宮島達夫ほか編 (2014) 『日本古典対照分類語彙表』笠間書院
- 商務印書館編集部編 (2015) 『辞源』第3版, 商務印書館
- 中国社会科学院語言研究所編 (2012) 『現代漢語詞典』第6版, 商務印書館
- 羅竹風主編, 中国漢語大詞典編輯委員会、漢語大詞典編纂処編 (1986-1993) 『漢語大詞典』漢語大詞典出版社